

佛教論理学派の論証式

稻 見 正 浩

1. はじめに

インド仏教最後期のモークシャーカラグプタ（11～12世紀頃）は『タルカバーシャー』第三章において仏教論理学派の主張内容をしばしば論証式（prayoga）でまとめている。一例を示せば以下のようになる。

およそ心であれば、それは〔後続する〕別的心を生み出す。たとえば、現在の心のように。
 (=A) 臨終時の〔心〕も心である。 (=B) これは本性という証因（svabhāvahetu）である。
 (=C) (TBh 63, 1-3. Kajiyama 1966: 137-138; 梶山 1975: 126-127 参照。)¹⁾

彼によれば、論証式は遍充（vyāpti）を示す支分（A 部分）と主題所属性（pakṣa-dharmatā）を示す支分（B 部分）との二つの支分からなる。（TBh 27, 12-13.）また、この例のように最後に証因分類ともいるべき部分（C 部分）が付加されていることが多い。この論証形式はダルマキールティ（7世紀頃）の後継者達の作品中に提示されている論証式に共通して見られるものである。

仏教論理学派の論証式は、これまで検討対象になってきたのは主にディグナーガ（5～6世紀頃）の三支作法までで、ダルマキールティ以降の論証式についてはあまり論じられてこなかった。本稿では、特にダルマキールティ以降の仏教論理学派の論証式に焦点を当てて、その特徴について考察したい。

2. ディグナーガの論証式

インドの論争術の伝統においては、主張・理由・喻例・適用・結論からなる五支作法（五分作法）という論証形式が用いられてきた。たとえば、ニヤーヤ学派のヴァーツヤーヤナ（5c頃）が提示する論証式は以下のようなものである。

〈主張〉 音声は無常である。〈理由〉 生起を属性とするものだから。〈喻例〉 生起を属性と

する鍋などの実在が無常であることが現に見られる。〈適用〉音声も同様に生起を属性とするものである。〈結論〉したがって、音声は生起を属性とするものだから、無常である。(See Nyāyabhāṣya ad Nyāyasūtra 1.1.39.)

これに対し、ディグナーガは主張・理由・喻例からなる三支作法を採用した。ディグナーガの説く論証式は以下の形式をとる。

〈主張〉音声は無常である。〈理由〉意志的努力の直後にあるものであるから。〈喻例〉〔同喻:〕意志的努力の直後にあるものはすべて無常であることが経験される。壺などのように。〔異喻:〕恒常なものはすべて意志的努力の直後にあるものではないことが経験される。虚空などのように。(PSV ad PS IV 2; NMu 2c5-8. 北川 1965: 240-243; 桂 1981: 63-65 参照。)

最初に〈主張〉が述べられ、次に〈理由〉が「…であるから」という形で言及され、最後に〈喻例〉が同喻(sādharmyadr̥ṣṭānta)と異喻(vaidharmyadr̥ṣṭānta)の二喻並記で提示される。二喻のいわゆる喻体部分が対偶表現になっていることは北川秀則氏(北川 1965: 39-41)が指摘するとおりである。

支分の提示の点では、五支作法から最後の二つの支分、〈適用〉と〈結論〉を除外した形になっている。ディグナーガは〈理由〉は主題所属性を、〈喻例〉は関係を、〈主張〉は論証対象をそれぞれ示すために述べられるが、それ以外の〈適用〉などの支分は不要であると考えていた。(PS (V) IV 6. Cf. NMu T1628 3a7-8. 北川 1965: 267-268; 桂 1981: 73-76 参照。)

彼が論証式の提示に関しても〈証因の三条件〉説を念頭に置いていたことは明らかである。〈理由〉で第1条件の主題所属性が、〈喻例〉の同喻部分で第2条件のアンヴァヤが、異喻部分で第3条件のヴィヤティレーカが示されると理解していると思われる。しかし、同喻と異喻を別々の支分に分けない点や、支分の順序などからすると、〈証因の三条件〉説に依拠しつつも、五支作法等の論争術の伝統を受け継いだものとみなせる。また、〈証因の三条件〉の提示という観点からすれば〈主張〉の提示はさほど明確な意義をもたないが、ディグナーガはこれを完全に捨てることはできなかった。

〈喻例〉で述べられるものが「関係」と言及される点も注目してよい。証因の第2条件と第3条件を表示する二つの喻例の存在意義を「関係」の表示とする背景に「遍充」の想定が読み取れる。しかし、実際の論証式においてはディグナーガは両喻並記を捨てることはできなかった²⁾。

3. ダルマキールティの論証式

ダルマキールティの論証式はディグナーガのものとは全く異なった形式をとる。彼は論証式を二種に分け、例示する。

肯定的随伴を述べる論証式：〈遍充〉およそ作られたものであれば、それはすべて無常である。壺などのように、〈主題所属性〉音声も作られたものである。（PVS 97, 19–21. Cf. PVin II 76, 3–4.）

否定的随伴を述べる論証式：〈遍充〉無常であることがなければ、作られたものであることもない。〈主題所属性〉しかし、音声は作られたものである。（PVS 97, 24–25. Cf. PVin II 76, 5–6.）

両例とも、まず最初に〈遍充〉を、次に〈主題所属性〉を述べるという二支からなる論証式である。〈遍充〉の部分はディグナーガの〈喻例〉に相当するが、ディグナーガと異なり、肯定的随伴を述べる論証式ではアンヴァヤのみが、否定的随伴を述べる論証式ではヴィヤティレーカのみが述べられる。いずれか一方で他方が含意されるので両喻が並記されることはない³⁾。また、〈主題所属性〉を述べる部分はディグナーガにおいては〈理由〉支分で「作られたものであるから」という第5格表現で述べられていたが、ダルマキールティの論証式では「音声も作られたものである」という主題所属性を直接表現した形になっている。さらに、この二支以外には〈結論〉等だけでなく〈主張〉も述べられない⁴⁾。そして、〈喻例〉支分に相当する〈遍充〉が先に述べられ、そのあとで〈理由〉支分に相当する〈主題所属性〉が述べられるので、陳述順序がディグナーガの論証式とは逆になっている。ダルマキールティによれば、二支の順番には決まりがなく、逆順の論証式も可能である。（HB 8, 3–4; VN 1, 10–18.）しかし、彼が作品中に提示するほぼ全ての論証式は〈遍充〉〈主題所属性〉の順番である。

ダルマキールティは最初期の作品と思われる PVS から一貫してこの形式の論証式を提唱している。これらの変更のルーツはすべてディグナーガの議論にさかのぼることができる。しかし、ディグナーガは具体的に論証式に反映させるまでには至らなかった。これに対し、ダルマキールティは大胆に論証式に手を加え、古い論争術からの脱却を図った。

4. ダルマキールティの後継者達の論証式

ダルマキールティの直弟子と伝えられるデーヴェンドラブッディ（7世紀頃）

は PV の注において、度々、議論の内容を論証式にまとめている。例をあげれば以下のようになる。

〈遍充〉或る人 (x) が或ること (y) の達成手段を顛倒なく実践すれば、その人 (x) はそれ (y) を獲得する。たとえば、病人が健康回復の手段を顛倒なく実践すれば、[健康状態を獲得する] ように。〈主題所属性〉世尊もプラマーナたることの達成手段を顛倒なく実践した方である。〔証因分類〕これは《本性という証因》である。(Pramāṇavārttikapañjikā D4217, Che 7a3–4; P5717(b), Che 8a1–2.)

デーヴェンドラブッディはプラマーナシッディ章だけでも実に約250の論証式を提示する。彼の論証式では、ダルマキールティ同様、最初に〈遍充〉が述べられ、次に〈主題所属性〉が述べられる。そしてダルマキールティの論証式にはなかった〔証因分類〕が最後に付加されている⁵⁾。〈主題所属性〉が先に述べられる逆順の論証式は全くない。基本的にこの形式は一定である。このような論証式の形式は、本稿の冒頭にあげたモークシャーカラグプタの例のように、他のダルマキールティ後継者達にも共通して見られるものである。

デーヴェンドラブッディ以降、佛教論理学派の論証式ではほとんどのケースでこの証因分類が言及されるが、これを独立した支分とみなす論師はいないようである。論証式の本体はあくまでも〈遍充〉と〈主題所属性〉の二支であり、それに付加要素として証因分類が言及されるという形式と考えられる。

遍充は何でも勝手に述べてよいものではなく、認識手段によって確立された本質的関係に裏打ちされたものでなければならない。すなわち、証因は三種の証因のうちのいずれかでなければならない。論証式の最後に証因分類が付加されるのは、提示される遍充がきちんとした根拠にもとづいていることを示す意味があると考えられる⁶⁾。また、ダルマキールティは論証式を1) 肯定的随伴を述べる論証式と2) 肯定的隨伴を述べる論証式に大別するが、『ニヤーヤ・ビンドゥ』において、さらに三種の証因によってそれの下位分類を例示している。証因分類の付加にはこの例示が影響したこととも十分考えられる。

5. 〈主題所属性〉の陳述 = 〈適用〉

ダルマキールティ以降の論証式の〈主題所属性〉の部分は、既に見てきたようにディグナーガ以来の伝統からすれば〈理由〉の陳述ということになる。ダルマキールティはディグナーガを受け、〈適用〉と〈結論〉をきっぱりと否定するので、〈主題所属性〉はあくまでも〈理由〉である。しかし、ダルマキールティ以

降の後継者たちの論証式において〈遍充〉に後続するこの〈主題所属性〉の部分は、ニヤーヤ学派などの五支作法の〈適用〉の陳述に相当するものとも見えなくもない。

『ニヤーヤ・スートラ』は〈適用〉の意味を所証の「連結」(upasamphāra)と説明する。(NS I-1-38.) また、ウッディヨータカラは〈適用〉には、1) 喻例との照らし合わせ(pratibimbana), 2) 所証に証因があること(sambhava)の陳述等の意味があると説明する。このうち「所証に証因があること」は〈主題所属性〉以外の何物でもない。ウッディヨータカラは〈主題所属性〉が述べられるのは〈理由〉においてではなく〈適用〉においてであると考えている⁷⁾。

では仏教論理学派の論証式を他学派の人達はどう見ていたのであろうか。ジャイナ教白衣派のヴァーディ・デーヴアスリー(1086-1169)は、仏教の論証式を「遍充をともなった〈喻例〉」と「証因の〈連結〉」の二つの支分からなると言及している。彼はダルマキールティ以降の仏教論理学派の論証式において述べられる〈主題所属性〉を「証因の〈連結〉」と説明し、〈適用〉の一種とみなしていたと思われる⁸⁾。また、ミーマーンサー学派のパールタサーラティ・ミシュラ(1050-1120)は、仏教徒の論証式「およそ作られたものであればそれは無常である。たとえば、壺のように、音声も作られたものである」を〈喻例〉と〈適用〉の二つの支分からなるものと説明している。すなわち、〈主題所属性〉を〈適用〉とみなしている⁹⁾。さらに、ニヤーヤ学派のバッタ・ジャヤンタ(9世紀後半頃)は、「論証式は〈遍充〉(=喻例)と〈主題所属性〉(=理由)の二つの支分からなるのであって、〈適用〉は不要である」という仏教説を批判して、仏教の論証式の〈主題所属性〉の部分は〈理由〉ではなく、〈適用〉の陳述である、と指摘している¹⁰⁾。このように、他学派の人々は仏教論理学派の論証式における〈主題所属性〉の部分を〈適用〉の陳述とみなしている。

仏教論理学派の論師はディグナーガからの伝統もあって、彼らの論証式が〈喻例〉と〈適用〉の二支からなるとは明言しない。しかし、ダルマキールティ以降の論証式の〈主題所属性〉の部分が〈適用〉の意味をもつことは十分意識していたようである。ヴィディヤーカラシャーンティ(11~12世紀頃)は〈遍充〉の陳述が先にある論証式では〈主題所属性〉の陳述こそが〈適用〉の役割を果たしているので〈適用〉の陳述は不要である、と述べている。彼は〈主題所属性〉の陳述が他ならぬ〈適用〉の陳述であると理解しているのである¹¹⁾。また、シャーンタラクシタ(725-788)は〈適用〉に関するウッディヨータカラ説を検討する際に、

「『およそ作られたものであれば、それはすべて無常である。壺のように、音声も同様に作られたものである』と〔音声にも証因が〕存在すること (*sambhava*) を示すために〈適用〉の陳述が述べられるというなら、このようなことは我々も認めると述べている。シャーンタラクシタは仏教徒の論証式の〈主題所属性〉は〈適用〉そのものであることは認めるが、五支作法のように〈理由〉を述べた後でさらに〈適用〉も述べることを否定しているのである¹²⁾。

ダルマキールティにも〈主題所属性〉が〈適用〉を意味すると理解していたことをうかがわせる発言がないわけでもない。彼は『ヘートゥ・ BINDU』最終部で証因の六条件（六特質）説を批判する際に、論敵が考える「証因が認識されること」 (*jñātava*) が正しい証因の別の条件（特質）としてふさわしくないことを論じている。彼は「証因が認識されること」は第2条件や第3条件が述べられれば理解されるので、別個に述べる必要はないと主張するが、その例として「〈主題所属性〉〔の陳述〕によって〈適用〉の意味〔が理解されるので、〈適用〉は〈主題所属性〉とは別個に述べられる必要はない〕と同じである」 (HB 40, 1-3.) と述べている。ダルマキールティになって〈理由〉の表現形式が主題所属性の直接表現に変化したことも勘案すれば、彼は〈主題所属性〉の陳述が〈適用〉支分と同内容であること、さらに言えば、その陳述そのものが〈適用〉支分であることを意識していたと思われる。

さらに、ディグナーガが〈適用〉を用いた論証式も考えていたことは注意してよい。彼は〈理由〉で「主題の属性でないもの」が提示される例外的な論証式「〈主張〉音声は無常である。〈理由〉作られたものは無常であるから」を検討している。これに関して、ディグナーガはこの論証式の一見〈理由〉のように見える支分は〈理由〉ではなく、不可離の関係を述べた〈喻例〉に他ならないと指摘する。そして、興味深いことに「主題の属性である証因は〈適用〉によって示される」と述べている。(PS (V) III 14 cd-15ab. 北川1965: 162-164; 桂1978: 119-121 参照。) ここで彼が考える論証式は以下のようなものである。

〈主張〉音声は無常である。〈喻例〉作られたものは無常であるから。[壺などのように。] 〈適用〉同様に、音声も作られたものである。

既に見たように、ディグナーガは三支作法をとなえ、〈適用〉を論証式から除外し、主題の属性である証因、すなわち、証因の〈主題所属性〉は〈理由〉で述べられると主張した。しかしながら、この論証式においては〈主題所属性〉は〈適

用〉支分で述べられることになる¹³⁾.

この論証式はディグナーガにとってはあくまでも変則的なものである。彼は古典的な三支作法にこだわり、このような形式は積極的には採用しない。しかし、この論証式においては〈遍充〉と〈主題所属性〉が直接表示されるという点で、ディグナーガにとっても好ましいように思える。実際にダルマキールティの論証式はこれから〈主張〉を取り除いた形に極めて近い。このディグナーガの理解に照らせば、ダルマキールティの論証式で〈主題所属性〉が述べられる支分は〈適用〉であると理解することも十分可能である。

仏教論理学派の論師で〈主題所属性〉を〈適用〉であると明言する者はいない。〈適用〉は五支作法の支分を連想させ、それはディグナーガ、ダルマキールティによって不要なものとして放棄されたので、〈適用〉であるとは言いにくかったのかもしれない。しかし以上からすればこれが〈適用〉と同じ内容をもつことは明白である。

6. おわりに

検討結果をまとめれば以下のようになる。1) ディグナーガは種々の発展的考え方をもっていたが、それを論証式に反映させることはできず、論争術の伝統を受け継いだ三支作法を説いた。2) ダルマキールティはディグナーガの問題意識をさらに深化させ、それを具体的に論証式に反映させた。彼は〈遍充〉と〈主題所属性〉の二支からなる新たな論証式を提唱した。3) ダルマキールティのすぐ後に、この二支に〔証因分類〕が付記される形式が定まった。〔証因分類〕付記は〈遍充〉の成立基盤を示す意味をもつ。4) ダルマキールティ以降の論証式の〈主題所属性〉は〈理由〉とされるが、実は五支作法などの〈適用〉に相当する。

仏教論理学派の論証式における二支の〈遍充〉から〈主題所属性〉への流れでは、一般法則を提示してから、それを個別の事例に当てはめるという手順がみてとれる。この点では定言的三段論法の「大前提」と「小前提」の構造との類似性を確認できる。しかし、「大前提」にあたる〈遍充〉で実例が提示される点と「結論」(〈主張〉も)が省略される点は、定言的三段論法と異なる。また、二支の後に、〔証因分類〕が付記される点も仏教論理学派の論証式の特徴である。

* 本稿は発表時に配付した論文原稿の簡略版である。資料の翻訳等を含む研究は別の機会に発表する予定である。1) 梶山氏は論証式の翻訳の際に原文にない〈結論〉を補うが、ダ

- ルマキールティ達の主張にしたがえばこのような補足は不要である。 2) 両喻を並記すべきか否かのディグナーガの議論については北川 1965: 39–53 参照。 3) VN 17, 12–15 によれば、両喻を並記すると〈敗北の立場〉(nigrahasthāna) になる。 4) VN 17, 9–11 によれば、〈適用〉や〈結論〉などと同様に〈主張〉を陳述すると〈敗北の立場〉になる。 5) 梶山氏はこの部分を「これは…という能証にもとづく推理である」などと訳すが、厳密には正確な訳ではない。 6) PVSV 97, 27–98, 4; NB III 26–32. 7) *Nyāyavārttika*, eds. Taranatha Nyaya-Tarkatirtha and Amerendramohan Tarkatirtha, Calcutta Sanskrit Series Nos. 18, 29, Calcutta 1936–1944; Repr., Kyoto 1982: 313, 7–314, 11 ad NS I-1-38. 8) *Syādvādaratnākara*, ed. Motilal Lāghajī, 5 vols., Poona 1927–1931, repr., Delhi 1988: 559, 7–12. 9) *Śāstradīpikā*, ed. Dharmadattasūri, Nirṇayasāgar Press, Bombay 1915: 64, 5–9. 10) *Nyāyamañjari*, ed. Sūrya Nārāyaṇa Sukla, Kashi Sanskrit Series vol. 106 (2 parts), Benares 1936, repr., 1969, 1971: 578, 17–579, 3. 11) *Tarkasopāna*, ed. Giuseppe Tucci, in *Minor Buddhist Texts, Part I*, Serie Orientale Roma 9, Roma 1956, repr., Kyoto 1978: 299, 22–27. 12) *Vādānyāyātiṭkā*, ed. Dwarika Das Shastri, Baudha Bharati Series, Varanasi 1972: 62, 16–19. 13) この箇所の理解は桂 1978: 119–121 とは異なる。

〈略号〉 TBh Tarkabhāṣā (Mokṣākaragupta). Ed. H. R. Rangaswamy Iyengar. *Tarka-bhāṣā and Vādashthāna of Mokṣākaragupta and Jitāripāda*. Mysore: The Hindustan Press, 1944. NMu Nyāyamukha (Dignāga). Chinese trans. 大域龍菩薩造『因明正理門論本』一卷 (玄奘訳), T1628. PV I; PVSV Pramāṇavārttika (Dharmakīrti), Chapter I; Pramāṇavārttikasvopajñavṛtti (Dharmakīrti). Ed. Raniero Gnoli. *The Pramāṇa-vārttikam of Dharmakīrti: The First Chapter with the Autocommentary. Text and Critical Notes*. Serie Orientale Roma 23. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1960. PVin I, II Pramāṇaviniścaya (Dharmakīrti), Chapter I, II. Ed. Ernst Steinkellner. *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya: Chapters I and 2*. Beijing: China Tibetology Research Center, 2007. PS (V) III, IV Pramāṇasamuccaya (-vṛtti) (Dignāga), Chapter III, IV. Tibetan translation. Edited in Kitagawa 北川 (1965) 1985. VN Vādānyāya (Dharmakīrti). Ed. Michael Torsten Much. *Dharmakīrtis Vādānyāyah Teil I*. Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Süd- und Ostasiens 25. Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1991. HB Hetubindu (Dharmakīrti). Ed. Ernst Steinkellner. *Dharmakīrti's Hetubindu*. Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region (Book 19). Beijing: China Tibetology Publishing House; Wien: Austrian Academy of Sciences Press, 2016.

〈参考文献〉

- Kajiyama, Yuichi. 1966. "An Introduction to Buddhist Philosophy: An Annotated Translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta." *Kyōto daigaku bungakubu kiyō* 京都大学文学部紀要 10: 1–173.
 梶山雄一 1975 『論理のことば』 中公文庫。
 桂紹隆 1978 「因明正理門論研究 [二]」『広島大学文学部紀要』38: 110–130.
 ——— 1981 「因明正理門論研究 [四]」『広島大学文学部紀要』41: 62–82.
 北川秀則 (1965) 1985 『インド古典論理学の研究——陳那 (Dignāga) の体系——』 臨川書店。

〈キーワード〉 佛教論理学派, 論証式, 三支作法, 二支作法, 遍充, 主題所属性, 証因分類, 適用, ディグナーガ, ダルマキールティ, デーヴェンドラブッディ
 (東京学芸大学教授, 博士 (文学))